■特集■

恩の構造

一九八一年（昭和五十六年）は、日蓮聖人入滅七百年にあたる。日蓮聖人のしるした法華経の行者としての信仰と教説を受けとめ、それを現代社会に弘めていくことなしに、日蓮聖人への報恩はありえない。日蓮聖人の死の意味を問い直すことは、日蓮聖人が末法において教示し実践しつづけた永遠なる救済への誓願を聞くことである。法華経の信仰をもって一切衆生を救い報恩の人生に導いていく魂を見ることである。死んで死なざる精神を信じ、習学し、現代にいかすことである。そこに日蓮聖人への報恩があり、釈迦仏・法華経の教説を死身弘通した日蓮聖人の報恩の功徳によって、われわれもまた報恩の人生をきり開く力が与えられているのである。日蓮聖人七百遠忌は、現代人に、報恩に生きることの意義をよびかけ、法華経の恩徳とそれを体現した日蓮聖人の教説及び生涯を伝えひろめて、自己の精神形成に努めつゝ、法華経・日蓮聖人の信仰を弘通する道へ歩むよう、人々を教化していくものでなければならない。

恩・報恩という言葉は、それが人間の生き方の根本にかゝわるものでありながら、わが国の歴史状況の中で数々の手あかに汚されてきた。その恩の歴史的展開をとらえつゝ、日蓮聖人の報恩観をさまざまな視角から習学研究することによって、真実の報恩に生きる意義を明らかにせねばならない。

このような観点から、ここに恩の構造を特集し、その一端を考えてみたいと思う。

（論文のなかで日蓮とした場合のあるのは尊称を略したものである）

編集部